

駒澤大学 1 - 1 東京学芸大学

巧者・学芸に痛恨ドロ

終盤の決定的チャンス逃し、悔しがる山崎 (撮影・星 宏樹)

これを最後の教訓に

試合終了のホイッスルと同時に、荒れた芝生、足がつる選手、がっくりと肩を落とす選手、そして会場からの大きなため息がこの試合の全てを物語っていた。

リーグ第19節東学大戦は、1-1のドロ。前半10分から攻勢を仕掛けた駒大だったが、「他チームと比べてDFとボランチの関係が強かった」と高崎が振り返るように東学大の強固な守備に苦戦。中盤のプレッシングで相手攻撃の芽を摘み取るまでは良かったが、前線の選手の動きに迷いが見られ、決定機まで持ち込むことができない。前半ロスタイム、最終ラインを低く保ち続けカウンターのチャンス伺う東学大に、ペナルティエリア付近の左サイドで素早いパスワークからのミドルシュートを許し失点。しかしその後、八角のロングスローをバックヘッドで合わせた高崎のボールはそのままゴール右隅に吸い込まれてすぐさま同点に追いつく。

後半は立ち上がりからラフプレーもあり、平凡なパスもタッチラインを割るなど玉際の扱いが雑になって両者ともリズムを作り出すことができない。途中に那倉、東平、田谷の投入で攻撃の選択肢が増えたが最後まで得点は奪えずタイムアップ。後半のシュート数に関しても駒大が2だったのに対して、東学大は8。ロスタイムには中央からのミドルシュートがクロスバーを叩くなどあわやといった場面を作らせてしまった。

秋田監督は「あまりよくなかったので、引き分けてよかったかなという感じ。これは駒澤のゲームじゃない。気持ち入れて戦って欲しい」。八角主将は「一番やってはいけない結果になってしまった。菊地や山内がいらない分やってやるうとは思っていたけど、こないだの大事な法大戦に勝って少し気の緩みがあったことは事実」と厳しい表情だった。

残されている時間は意外と少ない。試合後のミックスゾーンで「あと3つ全部勝つ」と声を揃えた選手たちだったが残る相手はいずれも優勝争いに食い込んでくる強敵。勝ち点差が詰まっている上位5チーム全てに優勝の可能性があるという大混戦に変わりはない。

ピッチ内外で全てを熟知する「ベテラン選手」がいないユースカテゴリーには、何もかもできてしまう絶対的な選手の存在より、ベンチ内外を含めて個々の意識の高さによる「チームとしての結束力」が何よりも重要。大学サッカーの場合であれば尚更のことだ。例えばプロと比べて技術的に低かったとしても、それが人々を興奮させる魅力の1つであり秋田監督が目指す「学生らしいサッカー」の醍醐味もある。そこにチームのテーマではない「徹底」という言葉の意義が隠されているのではないだろうか。(吉岡克洋)



守り守られ勝ち点1。